戸張孤雁の版木について

深山 孝彰

館蔵資料研究

周知のごとく戸張孤雁は、アメリカ留学時代の親友前原守衛の没後、遺跡を踏襲した彫刻家であるが、大正の初めから版画にも取り組み、大正四年から「孤雁新東鏡会」を結成、同一年には日本で初めての版画作品集『創作版画と版画の作例法』を刊行するなど、創作版画の発展普及に努めた。

愛知県美術館では、孤雁の版画版木百枚、約二百面を所蔵している。これは、当館が新館開館中の中村昭和六十四年と、孤雁の版画版木百枚、約二百面を所蔵している。これは、当館が新館開館中の中村昭和六十四年と、孤雁の版画版木百枚、約二百面を所蔵している。これは、当館が新館開館中の中村昭和六十四年と、孤雁の版画版木百枚、約二百面を所蔵している。これは、当館が新館開館中の中村昭和六十四年と、孤雁の版画版木百枚、約二百面を所蔵している。これは、当館が新館開館中の中村昭和六十四年と、孤雁の版画版木百枚、約二百面を所蔵している。これは、当館が新館開館中の中村昭和六十四年と、孤雁の版画版木百枚、約二百面を所蔵している。これは、当館が新館開館中の中村昭和六十四年と、孤雁の版画版木百枚、約二百面を所蔵している。これは、当館が新館開館中の中村昭和六十四年と、孤雁の版画版木百枚、約二百面を所蔵している。
ことあるときは、短冊や絵巻などに描かれており、見ることができる。もっともこの種の浮世絵は、人情の変化を表現するかたちで、その変化を身近な生活の場面に見ることができる。また、それが描かれた背景や構成の変化も、時代の変化を示す重要な要素である。このように、浮世絵は多様な表現方法と題材を持つが、一つの共通点として、観客の心を惹きつける力がある。
「孤雁新編錦絵会」の作成にあたっては、作曲家の小森田誠吾が作曲を担当し、歌詞は小森田誠吾自身が手がけたものである。作曲は、小森田誠吾の独自の音楽性と絵画性が融合した作品として表現されている。

また、作曲の一部は、小森田誠吾が作曲を担当した「孤雁新編錦絵会」のテーマソングとしても採用されている。このテーマソングは、孤雁新編錦絵会の活動を反映し、孤雁の精神を象徴するものとして、多くの聴衆から愛される作品となっている。
5 問題点と版木の期待

では、孤雁は実際のところ、版画技法を身につけ、制作を開始したのではあるが、初期の作品としては、《稻村の秋》（図1）が大正五年、《千住大橋の雨》が同年とされている。明治四十五（一九一一年）より大正四年、年間孤雁の体裁が悪化して制作者は困難になり、これが版画に向かうきっかけとなったと考えられる。しかしつ年の日記には版画に関する記述がなく、また、《千住大橋の雨》のような作品が早くなかったものだと考えられる。この理由はどこにあるのか、さらに《孤雁》などの版画について、検討する必要がある。昭和二年、孤雁没後、遺品をもって破損するに至っていた作品は、昭和十年代に弟子の喜多武四郎が撤去しきりに検討することによってある程度明らかになるであろう。また孤雁の版画には、喜多はその死の前年の昭和四年四月に多くの作品を東京国立近代美術館に寄贈しているという。この昭和四年四月の寄贈によって孤雁の版画の数が増加し、孤雁の作品は、特に昭和初期の作品が見られる。昭和十年代に弟子の喜多武四郎が撤去した作品は、昭和五十年代に加藤版画研究所の加藤順三によって始まったが、《稲村の秋》（巻第一、《雨乗り》など数点を描いたとされ、1966年頃に完成した。この作品群を含め、現在に至るまで、加藤版画研究所が所蔵している作品も多い。西川の制作時期が近いものとして、推定のことがらとなることも期待される。
かつたため、これら版本の調査法について、原資料としての価値を保つか否かを検討するため、版本に付着している絵具を水でよくて紙に写し取った。その研究結果を元に、版画に使用している絵具を紹介するという試みが考えられたが、結局見送りとした。本稿は、版画に使用している絵具を紹介するとして報告される。

2 概念と検討

版画の概要は別表のもりでである。配列は作品名の五十音順としたが、表の末尾、作品名の頭に※を付けたものは、後で述べる別表を参照のことである。本稿よくとるため、ビジュアル新聞で提示して恐れ入るのを避け、表の後で述べる別表を参照することを推奨したい。
美しさは豆の国……輝く豆の国。

一月と結ばれていることから考えても、制作年は大正四年とも思われる。

今後の発見を見守りたい。

（田原雄也）
自刻小品にあたると思われる。この作品が《曲芸》（図21）の線や彩色は、版画による墨がなげばリトグラフかと思うほど淡彩模様に近いもので、《孤雁遺集》で石版とされる《曲芸》（図22）や《煉婦》（図23）も現物にあたって確認したい。

《孤雁遺集》は大正二年作とされるが、四月に発行された。経を通じて、後述の《孤雁遺集》の作成差によって、《孤雁遺集》の発行差は大正二年とならなくなる。なお、《孤雁遺集》及び《煉婦》は日本製本社で出版されたもので、発行差は1914年（大正三年）4月1日である。
この画像は、日本語の文を含むページを示しています。具体的なテキストの意味を理解しやすいように、以下に翻訳を行います。

「山田さんは、毎日散歩をしています。」

「森さんは、毎日ジョギングをしています。」

「小野さんは、毎日ピアノを練習しています。」

「白石さんは、毎日お散歩をしています。」

以上の文は、それぞれ異なる人々が毎日異なる活動を行っていることを示しています。
制作の形態に関して、彫りについてはかなり専門の彫り師が行っていることが明らかになったが、筆者には版画から自刻他刻を即座に判断することはできないため、今後木版専門家の指導を仰いとした。なお、彫刻を誰がかかったか、版画がどれほど大切であるか信ずるという困難がまだ残っているが、「創作版画と版画の作り方」（孤雁遺集）所収版で「自分は彫りよりもむしろ描りの方が大切である」と信ずるようになるということである。また、新東経会での反古の数の大きなから彫版師、絵本の象形などを大切にすることを強く推奨したが、今回版画を見た碁（伊豆風景）（孤雁遺集）所収版や小田原の地蔵さん（個人蔵、户張孤雁の影刻と小田原、一九九四年）などは絵本に見る平面的で段階的な色と調子を彫版の色版に想定したものかのように思われる。足元は書画など曲芸師を描いた素描を、これらを述べた石井鶴の素描を考えてみる必要もあるだろう。再関連して問題となるのが「創作版画」と版画の作り方。という孤雁自身の言葉と矛盾である。これは、創作版画協会としての発言こと新東経会作家としての行為と矛盾もあるが、逆に、彼の水彩画がとともに版画を意識して描かれており、版画家や版画愛好家、孤雁の全像をかすめてみたい。
三浦錦太郎、故戸張臥麿氏の思出。三浦、『浮世絵芸術』第三巻第一号、昭和九年。

第二、四回分は展覧会準備中に綿貫不二夫氏から、第二、五、六回分は本稿執筆中に高留直麿氏からご提供いただいた。

翌年から改訂再版を計画し、実現はしなかったが大正十四年『アルヌすたし美術講座』と昭和五年『孤雁遺集』に所収の二種の増補改訂版がある。

熱意と良心をもっての後撰り作業だったようだが、加藤氏が気 heeftに感じての勤しめなものだったため、続編のための契約なく、または後の現代版画センターの解散した退職の難しさをあらためて痛感する。

日本近代版画の歩み展、永瀬義郎と大正・昭和戦前期の作家たち（練馬区立美術館、一九三三年四月）、小田原の静養先である徳川の清水喜一郎伊豆山からの葉書、『孤雁遺集』版『創作版画と版画の作り方』九四頁。
<table>
<thead>
<tr>
<th>番号</th>
<th>板寸</th>
<th>作品名</th>
<th>図柄</th>
<th>備考</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>001-A</td>
<td>42.4×28.5</td>
<td>麻の葉</td>
<td>額部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>001-B</td>
<td>42.4×28.5</td>
<td>麻の葉</td>
<td>魚子の麻葉繋、僧物のヒトデ文様</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>034-B</td>
<td>27.0×39.1</td>
<td>麻の葉</td>
<td>麻葉繋のこく一部</td>
<td>A面は「作村の秋」</td>
</tr>
<tr>
<td>039-A</td>
<td>28.0×22.7</td>
<td>麻の葉</td>
<td>赤色の麻葉繋3帯（魚子、人物の形を彫り抜く）、下部に割れ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>039-B</td>
<td>28.0×22.7</td>
<td>麻の葉</td>
<td>赤緑の麻葉繋2帯（魚子、人物の形を彫り抜く）</td>
<td>下部に割れ</td>
</tr>
<tr>
<td>042-A</td>
<td>43.0×28.3</td>
<td>麻の葉</td>
<td>線的な薄青い影</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>042-B</td>
<td>43.0×28.3</td>
<td>麻の葉</td>
<td>薄墨の影ペタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>045-A</td>
<td>42.6×28.8</td>
<td>麻の葉</td>
<td>墨板</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>049-B</td>
<td>42.6×28.8</td>
<td>麻の葉</td>
<td>華、眉、目、首の線（墨）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>069-A</td>
<td>62.4×46.4</td>
<td>麻の葉</td>
<td>周縁空削り文様、[下谷元日昇 新東錦館会]</td>
<td>B面は「#養生図絵」</td>
</tr>
<tr>
<td>072-B</td>
<td>48.9×36.6</td>
<td>麻の葉</td>
<td>四角い墨枠</td>
<td>A面は「化粧」</td>
</tr>
<tr>
<td>074-A</td>
<td>28.8×39.0</td>
<td>麻の葉</td>
<td>赤青色の3帯（間が空く）に魚子で麻葉繋</td>
<td>B面に鉛筆等（花様）</td>
</tr>
<tr>
<td>075-B</td>
<td>39.2×28.8</td>
<td>麻の葉</td>
<td>赤黒の3帯（間が空く）に魚子を麻葉繋</td>
<td>A面は「女学生」</td>
</tr>
<tr>
<td>076-A</td>
<td>42.9×29.0</td>
<td>麻の葉</td>
<td>線刻で麻葉繋（人物の形を彫り抜く）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>076-B</td>
<td>42.9×29.0</td>
<td>麻の葉</td>
<td>像物の部分、海星型文様</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>088-B</td>
<td>39.8×27.3</td>
<td>麻の葉</td>
<td>赤緑色の麻葉繋3帯（間が空く）</td>
<td>A面は「女（いかや）」</td>
</tr>
<tr>
<td>034-A</td>
<td>27.0×39.1</td>
<td>稲村の秋</td>
<td>色ペタ</td>
<td>B面は「麻の葉」、外枠</td>
</tr>
<tr>
<td>035-A</td>
<td>26.1×39.5</td>
<td>稲村の秋</td>
<td>墨板</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>035-B</td>
<td>26.1×39.5</td>
<td>稲村の秋</td>
<td>草と樹の薄緑</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>051-A</td>
<td>26.2×39.5</td>
<td>稲村の秋</td>
<td>山や地面の黄色系</td>
<td>外枠</td>
</tr>
<tr>
<td>051-B</td>
<td>26.2×39.5</td>
<td>稲村の秋</td>
<td>樹木などの濃緑色から細</td>
<td>外枠</td>
</tr>
<tr>
<td>052-A</td>
<td>26.0×39.1</td>
<td>稲村の秋</td>
<td>染の染子等、方印（胞）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>052-B</td>
<td>26.0×39.1</td>
<td>稲村の秋</td>
<td>染と染の地、[下谷中堅染下記下記録所会発行]</td>
<td>外枠付き</td>
</tr>
<tr>
<td>054-A</td>
<td>39.5×26.1</td>
<td>稲村の秋</td>
<td>染の染などの薄茶</td>
<td>外枠付き</td>
</tr>
<tr>
<td>054-B</td>
<td>39.5×26.1</td>
<td>稲村の秋</td>
<td>染下の版、樹木などの地の薄質</td>
<td>外枠</td>
</tr>
<tr>
<td>031-A</td>
<td>33.0×41.1</td>
<td>小田原紋様</td>
<td>屋根、男の髪、火鉢の袖</td>
<td>線割れ2条、右寄に不透明の墨木</td>
</tr>
<tr>
<td>031-B</td>
<td>33.0×41.1</td>
<td>小田原紋様</td>
<td>樹木</td>
<td>線割れ2条</td>
</tr>
<tr>
<td>033-A</td>
<td>46.4×32.8</td>
<td>小田原紋様</td>
<td>墨板</td>
<td>線に割れ（無間大）</td>
</tr>
<tr>
<td>033-B</td>
<td>46.4×32.8</td>
<td>小田原紋様</td>
<td>木、樹、髪留めの束、ほか</td>
<td>線に割れ（無間大）</td>
</tr>
<tr>
<td>036-A</td>
<td>35.7×50.6</td>
<td>小田原紋様</td>
<td>地色、太平楽、方印「作田」、形ムラセ改版ヤチ、BY.K.TOHARY</td>
<td>下部に細い割れ</td>
</tr>
<tr>
<td>036-B</td>
<td>35.7×50.6</td>
<td>小田原紋様</td>
<td>陣子と帯、袖の濃紺</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>100-A</td>
<td>41.0×23.6</td>
<td>小田原紋様</td>
<td>女の髪</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>100-B</td>
<td>41.0×23.6</td>
<td>小田原紋様</td>
<td>女の髪</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>065-A</td>
<td>26.5×39.4</td>
<td>御宿の浜</td>
<td>家の全体と草の地の明色のペタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>番号</td>
<td>板寸</td>
<td>作品名</td>
<td>図柄</td>
<td>備考</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>-----</td>
<td>-------</td>
<td>-----</td>
<td>-----</td>
</tr>
<tr>
<td>095-B</td>
<td>26.5×39.4</td>
<td>御宿の浜</td>
<td>家の暗部, 構, 草地の青</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>096-A</td>
<td>26.4×39.5</td>
<td>御宿の浜</td>
<td>緑の広いベタ, 頭突</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>096-B</td>
<td>26.4×39.5</td>
<td>御宿の浜</td>
<td>牛と草, 家の明色</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>079-A</td>
<td>25.5×39.2</td>
<td>御宿の浜, 林と洋館</td>
<td>御宿の牛, 林と洋館, 敷板貼 (緑の地に白ヌキの水鳥, 洋館の窓)</td>
<td>B面は「山の水車」</td>
</tr>
<tr>
<td>041-B</td>
<td>39.0×27.2</td>
<td>女 (いがや)</td>
<td>霧母描り, 敷物下方の文様</td>
<td>A面は「いちつじ日本髪の女」</td>
</tr>
<tr>
<td>088-B</td>
<td>39.8×27.3</td>
<td>女 (いがや)</td>
<td>褐の文様 2 つ (逆さに)</td>
<td>B面は「茶の葉」の 3 帯</td>
</tr>
<tr>
<td>008-A</td>
<td>39.1×28.3</td>
<td>鏡の前</td>
<td>墨板</td>
<td>外転</td>
</tr>
<tr>
<td>008-B</td>
<td>39.1×28.3</td>
<td>鏡の前</td>
<td>左手の持物, 三味線</td>
<td>外転</td>
</tr>
<tr>
<td>030</td>
<td>39.5×26.4</td>
<td>鏡の前</td>
<td>棟の文様 2 つ (逆さに)</td>
<td>外転</td>
</tr>
<tr>
<td>032</td>
<td>39.3×29.4</td>
<td>鏡の前</td>
<td>鏡面 (木目部分に埋木), 束</td>
<td>裏面に平刀の練習</td>
</tr>
<tr>
<td>050-A</td>
<td>39.0×28.9</td>
<td>鏡の前</td>
<td>顔の墨板, 鏡台の敷板貼 (墨と朱)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>050-B</td>
<td>39.0×28.9</td>
<td>鏡の前</td>
<td>緑 (鏡の掛け布と飾り), ピンク (帯と飾り)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>053</td>
<td>39.0×29.6</td>
<td>鏡の前</td>
<td>梟の文様, 飾りの朱と緑の丸点 × 2</td>
<td>虫食いあり, 外転ゆるむ</td>
</tr>
<tr>
<td>055-A</td>
<td>39.0×28.8</td>
<td>鏡の前</td>
<td>朱(鏡掛け布の裏, 飾り), 朱(帯), 敷板貼, 墨の白筆面紙貼</td>
<td>外転</td>
</tr>
<tr>
<td>055-B</td>
<td>39.0×28.8</td>
<td>鏡の前</td>
<td>墨と鏡の青ペタ</td>
<td>外転</td>
</tr>
<tr>
<td>078-A</td>
<td>39.5×26.3</td>
<td>鏡の前</td>
<td>上部に敷板貼</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>078-B</td>
<td>39.5×26.3</td>
<td>鏡の前</td>
<td>鏡の掛け布, 紅色の様子, 飾り, 三味袋に「孤月」, 墨書 [松草]</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>043-A</td>
<td>46.9×34.2</td>
<td>画室</td>
<td>墨板</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>043-B</td>
<td>46.9×34.2</td>
<td>画室</td>
<td>室, 椅子等の地</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>046-A</td>
<td>46.9×33.0</td>
<td>画室</td>
<td>グレー(柿, 額のマット等), 物の背上に壁用の囲花文 1 つ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>046-B</td>
<td>46.9×33.0</td>
<td>画室</td>
<td>花形 (緑), 茶 (茶色)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>047-A</td>
<td>47.0×33.0</td>
<td>画室</td>
<td>掛布と墨物の文様ペタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>047-B</td>
<td>47.0×33.0</td>
<td>画室</td>
<td>花形 (赤)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>048-A</td>
<td>46.9×34.1</td>
<td>画室</td>
<td>墨, 椅子等の脚</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>048-B</td>
<td>46.9×34.1</td>
<td>画室</td>
<td>掛布の文様 (緑), 墨物の柄文様</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>056</td>
<td>47.0×33.7</td>
<td>画室</td>
<td>掛布の文様等</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>077-A</td>
<td>39.2×25.4</td>
<td>画室</td>
<td>羽織の薄茶ペタ, 敷板 (茶)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>077-B</td>
<td>39.2×25.4</td>
<td>画室</td>
<td>羽織の薄茶ペタ, 茶色の文様の一部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>081-B</td>
<td>26.6×39.1</td>
<td>画室</td>
<td>髪× 2, 衣架</td>
<td>A面は「もたれて坐る女」</td>
</tr>
<tr>
<td>003-A</td>
<td>37.5×24.0</td>
<td>画室 (小)</td>
<td>墨物 (羽織), 敷物の上から映出 (未刷)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>003-B</td>
<td>37.5×24.0</td>
<td>画室 (小)</td>
<td>墨物 (羽織), 敷物の上から映出 (未刷)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>004-A</td>
<td>36.4×24.0</td>
<td>画室 (小)</td>
<td>墨の囲花文</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>004-B</td>
<td>36.4×24.0</td>
<td>画室 (小)</td>
<td>ストーブ, 室, 手首, 足袋のペタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>007-A</td>
<td>36.5×24.2</td>
<td>画室 (小)</td>
<td>掛布の文様 (未刷), 足部の文様 (未刷)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>番号</td>
<td>板寸</td>
<td>作品名</td>
<td>図柄</td>
<td>備考</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>--------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>007-B</td>
<td>36.5×24.2</td>
<td>画室（小）</td>
<td>掛布の文様の帷幕、壁の囲花文1つ (墨)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>044-A</td>
<td>39.2×29.8</td>
<td>画室（小）</td>
<td>墨板</td>
<td>B面は「画室（中）」</td>
</tr>
<tr>
<td>045</td>
<td>39.9×18.7</td>
<td>画室（小）</td>
<td>掛布の花形 (大桜の朱等)、椅子の脚、顔面</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>097-A</td>
<td>36.5×24.0</td>
<td>画室（小）</td>
<td>掛布の文様 (桜)、座のベタ数種 (未削)</td>
<td>未削</td>
</tr>
<tr>
<td>097-B</td>
<td>36.5×24.0</td>
<td>画室（小）</td>
<td>椅子、髪等のベタ、椅子の脚とストーブの数種 (未削)</td>
<td>未削</td>
</tr>
<tr>
<td>044-B</td>
<td>39.2×29.8</td>
<td>画室（中）</td>
<td>墨板 (小より少し大きい)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>013-B</td>
<td>48.4×35.6</td>
<td>丹極婦</td>
<td>頭と席囲</td>
<td>A面は「千住大橋の雨」</td>
</tr>
<tr>
<td>025-A</td>
<td>21.2×16.9</td>
<td>曲芸</td>
<td>掛灯 (未) と箱 (茶色、側面に「孤蛹」)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>025-B</td>
<td>21.2×16.9</td>
<td>曲芸</td>
<td>曲芸師のパンツ (2版)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>061-A</td>
<td>22.6×17.2</td>
<td>曲芸</td>
<td>墨線</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>061-B</td>
<td>22.6×17.2</td>
<td>曲芸</td>
<td>薄墨ベタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>002-A</td>
<td>49.2×34.3</td>
<td>化粧</td>
<td>髪、着物の地縫い、タンスの縫</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>002-B</td>
<td>49.2×34.3</td>
<td>化粧</td>
<td>タンス、揺のベタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>014-A</td>
<td>48.1×35.3</td>
<td>化粧</td>
<td>タンスの上の壁と座のベタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>014-B</td>
<td>48.1×35.3</td>
<td>化粧</td>
<td>絹と黒の重ね色、方印 (90度回転)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>018-A</td>
<td>42.6×33.1</td>
<td>化粧</td>
<td>鮮墨</td>
<td>緒割れ、黒間あり</td>
</tr>
<tr>
<td>018-B</td>
<td>42.6×33.1</td>
<td>化粧</td>
<td>着物部 (上下逆に2つ)</td>
<td>緒割れ、黒間あり</td>
</tr>
<tr>
<td>057-A</td>
<td>42.7×28.4</td>
<td>化粧</td>
<td>肉身部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>057-B</td>
<td>42.7×28.4</td>
<td>化粧</td>
<td>肉など</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>072-A</td>
<td>48.9×36.6</td>
<td>化粧</td>
<td>着物の文様、模とかんざし、髪 (毛毬入り)</td>
<td>B面は「麻の葉」</td>
</tr>
<tr>
<td>102-A</td>
<td>33.3×25.7</td>
<td>十二階</td>
<td>白ベタ、方印 (桜、東京下谷元日暮)、二十一号桜新東館機構会</td>
<td>B面は年賀状 (庚申)</td>
</tr>
<tr>
<td>103-A</td>
<td>3.7×25.6</td>
<td>十二階</td>
<td>墨 (茶板)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>103-B</td>
<td>33.3×25.6</td>
<td>十二階</td>
<td>茶茶の部分</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>060-A</td>
<td>22.6×17.2</td>
<td>様伴の女</td>
<td>髪と着物の色ベタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>060-B</td>
<td>22.6×17.2</td>
<td>様伴の女</td>
<td>緹花 (髪の総要縫なし)</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>098-B</td>
<td>23.0×33.2</td>
<td>様伴の女</td>
<td>桧 (出陣) と茶桜の空柄、孤桜東館機構会の借り換、桜姫着柄</td>
<td>A面は「桜」</td>
</tr>
<tr>
<td>027-B</td>
<td>25.2×30.1</td>
<td>女学生</td>
<td>髪と眉、目</td>
<td>A面は「女（近美薰描13）」</td>
</tr>
<tr>
<td>063</td>
<td>30.3×13.8</td>
<td>女学生</td>
<td>頬</td>
<td>割れた版木の右半</td>
</tr>
<tr>
<td>075-A</td>
<td>39.2×28.8</td>
<td>女学生</td>
<td>頬</td>
<td>B面は「麻の葉の3帯」</td>
</tr>
<tr>
<td>086-A</td>
<td>42.6×28.5</td>
<td>女学生</td>
<td>頭部と髪のベタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>086-B</td>
<td>42.6×28.5</td>
<td>女学生</td>
<td>背景の露母割り</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>087-A</td>
<td>39.1×25.8</td>
<td>女学生</td>
<td>頬 (白ヌキ)</td>
<td>A面は柏大の葉書と山</td>
</tr>
<tr>
<td>099-A</td>
<td>30.0×25.3</td>
<td>女学生</td>
<td>墨板</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>099-B</td>
<td>30.0×25.3</td>
<td>女学生</td>
<td>髪と眉</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>番号</td>
<td>板寸</td>
<td>作品名</td>
<td>図柄</td>
<td>備考</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>--------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>012-A</td>
<td>48.6×37.2</td>
<td>千住大橋の雨</td>
<td>会の末、馬車の緋、工場、方印</td>
<td>紋21</td>
</tr>
<tr>
<td>012-B</td>
<td>8.6×37.2</td>
<td>千住大橋の雨</td>
<td>極部と工場の一部</td>
<td>紋21</td>
</tr>
<tr>
<td>013-A</td>
<td>48.4×35.6</td>
<td>千住大橋の雨</td>
<td>厚板、落款[図版]（印なし）</td>
<td>B面は「六本桜」</td>
</tr>
<tr>
<td>015-A</td>
<td>48.7×35.7</td>
<td>千住大橋の雨</td>
<td>橋のベタ</td>
<td>上部中央に紬の割れ</td>
</tr>
<tr>
<td>015-B</td>
<td>48.7×35.7</td>
<td>千住大橋の雨</td>
<td>車軸、団子、舟、左横「東京下谷・孤桜新栄館画」、「影モリカ」等</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>016-A</td>
<td>48.3×33.4</td>
<td>千住大橋の雨</td>
<td>灰色ベタ（緑き緑、舟、横板目あり）、両極部下部に不貫通様木</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>016-B</td>
<td>48.3×33.4</td>
<td>千住大橋の雨</td>
<td>灰色ベタ（緑き緑、舟、極板目なし）、両極部下部に不貫通様木</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>017-A</td>
<td>48.7×33.1</td>
<td>千住大橋の雨</td>
<td>極板の濃色、車軸、上下に見当影り</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>017-B</td>
<td>48.7×33.1</td>
<td>千住大橋の雨</td>
<td>極板の濃色、人と馬と極板のベタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>021</td>
<td>48.7×26.7</td>
<td>千住大橋の雨</td>
<td>人と馬車と舟上半の薄黒、工場と煙突の薄紫</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>019-A</td>
<td>39.2×27.2</td>
<td>玉乗り</td>
<td>赤、足踏の緋</td>
<td>紋両側に「型木片各々」</td>
</tr>
<tr>
<td>019-B</td>
<td>39.2×27.2</td>
<td>玉乗り</td>
<td>頭部・中板目・裸子の薄茶と上部の朱</td>
<td>紋両側に「型木片各々」</td>
</tr>
<tr>
<td>020-A</td>
<td>39.0×27.6</td>
<td>玉乗り</td>
<td>暗緑と紬青</td>
<td>紋に「縁」型木片2つ</td>
</tr>
<tr>
<td>020-B</td>
<td>39.0×27.6</td>
<td>玉乗り</td>
<td>塗ベタ</td>
<td>紋に「縁」型木片2つ</td>
</tr>
<tr>
<td>023-A</td>
<td>16.0×36.8</td>
<td>唐丸</td>
<td>1面に2つ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>023-B</td>
<td>16.0×36.8</td>
<td>唐丸</td>
<td>1面に2つ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>029-B</td>
<td>42.0×14.7</td>
<td>唐丸</td>
<td>紋の秋</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>009-A</td>
<td>36.5×16.1</td>
<td>唐丸</td>
<td>《桜の秋の枝葉と一部の影、玉乗り》の墨版</td>
<td>紋の秋</td>
</tr>
<tr>
<td>009-B</td>
<td>36.5×16.1</td>
<td>唐丸</td>
<td>見当の見本</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>022-A</td>
<td>36.4×15.9</td>
<td>唐丸</td>
<td>玉3つ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>022-B</td>
<td>36.4×15.9</td>
<td>唐丸</td>
<td>文様（茶、緋、朱）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>029-A</td>
<td>42.4×14.7</td>
<td>唐丸</td>
<td>塗板</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>010-A</td>
<td>17.5×22.8</td>
<td>唐経</td>
<td>唐経の後の着物の帯、雲の帯</td>
<td>士経</td>
</tr>
<tr>
<td>010-B</td>
<td>17.5×22.8</td>
<td>唐経</td>
<td>尾の緑と黄色</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>067-A</td>
<td>22.8×17.2</td>
<td>唐経</td>
<td>地の火の影</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>067-B</td>
<td>22.8×17.2</td>
<td>唐経</td>
<td>火色の帯</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>068-A</td>
<td>22.9×21.1</td>
<td>唐経</td>
<td>塗経、茶緑の方印（ト）</td>
<td>紋の文様（茶色）</td>
</tr>
<tr>
<td>068-B</td>
<td>22.9×21.1</td>
<td>唐経</td>
<td>紋の文様（茶色）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>006-B</td>
<td>18.2×23.8</td>
<td>年賀状（丁巳・己未）</td>
<td>己巳（1917）のアダムとイヴ、未年（1919）の外人（隠刻）</td>
<td>備考に書「戸張弧雁」</td>
</tr>
<tr>
<td>006-A</td>
<td>18.2×23.8</td>
<td>年賀状（己未）</td>
<td>未年（1919）の墨板と帯の2版</td>
<td>備考に書「戸張弧雁」</td>
</tr>
<tr>
<td>028-B</td>
<td>20.6×28.3</td>
<td>年賀状（辛酉・己未）</td>
<td>辛酉（1921）の質問2種、己未（1919）の店名と署名部分の帯</td>
<td>B面は「*都市風景」</td>
</tr>
<tr>
<td>102-B</td>
<td>33.3×35.7</td>
<td>年賀状（庚申）</td>
<td>1920年、墨、茶、黄（4版と私稿）</td>
<td>A面は「十二階」</td>
</tr>
<tr>
<td>098-A</td>
<td>23.0×33.2</td>
<td>離</td>
<td>墨板</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>011-A</td>
<td>25.6×39.3</td>
<td>山の水車</td>
<td>赤（浮版）と青（石経と水流）</td>
<td>B面は「懸案の女」</td>
</tr>
<tr>
<td>番号</td>
<td>板寸</td>
<td>作品名</td>
<td>図柄</td>
<td>備考</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>011-B</td>
<td>25.6×39.3</td>
<td>山の水車</td>
<td>緑（木の葉など）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>079-B</td>
<td>25.5×39.2</td>
<td>山の水車</td>
<td>水流の緑</td>
<td>萩は《御宿の浜》ほか</td>
</tr>
<tr>
<td>089-A</td>
<td>28.7×39.0</td>
<td>山の水車</td>
<td>大樹、水車の脇の樹、川石の輪郭など</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>089-B</td>
<td>28.7×39.0</td>
<td>山の水車</td>
<td>薄い黄や赤のベタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>090-A</td>
<td>25.8×39.4</td>
<td>山の水車</td>
<td>竹林や水車のまわりの濃緑色</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>090-B</td>
<td>25.8×39.4</td>
<td>山の水車</td>
<td>大樹と川石のベタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>091-A</td>
<td>26.2×39.3</td>
<td>山の水車</td>
<td>薄緑のベタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>091-B</td>
<td>26.2×39.3</td>
<td>山の水車</td>
<td>黄緑の広いベタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>092</td>
<td>26.6×39.5</td>
<td>山の水車</td>
<td>墨板</td>
<td>掛け絵付き</td>
</tr>
<tr>
<td>093-A</td>
<td>26.3×39.3</td>
<td>山の水車</td>
<td>漆墨</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>093-B</td>
<td>26.3×39.3</td>
<td>山の水車</td>
<td>水車と家の壁の地色、敷寝毯</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>094-A</td>
<td>26.7×39.4</td>
<td>山の水車</td>
<td>漆墨</td>
<td>B面は《文様》</td>
</tr>
<tr>
<td>065-A</td>
<td>27.2×17.0</td>
<td>山の水車、美術院彰刻版</td>
<td>山の水車筆字、美術院彰刻版案内書き、玉押し、自画自叙刷ほか</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>058</td>
<td>25.4×41.0</td>
<td>梱体</td>
<td>漆墨板または雲母</td>
<td>2材</td>
</tr>
<tr>
<td>101</td>
<td>25.5×39.5</td>
<td>*牛のいる風景</td>
<td>草原、横向きの牛（川で水を飲む？）</td>
<td>掛け絵付き</td>
</tr>
<tr>
<td>040-A</td>
<td>39.2×27.0</td>
<td>*うつむく日本髪の女</td>
<td>墨板</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>040-B</td>
<td>39.2×27.0</td>
<td>*うつむく日本髪の女</td>
<td>鉄錬母絵</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>041-A</td>
<td>39.0×27.2</td>
<td>*うつむく日本髪の女</td>
<td>つや墨板、毛絨など</td>
<td>B面は《女の風景と着物の文様》</td>
</tr>
<tr>
<td>082</td>
<td>25.5×39.3</td>
<td>*温泉場</td>
<td>[せんさい] 屋、川、橋、人力車</td>
<td>掛け絵あと</td>
</tr>
<tr>
<td>027-A</td>
<td>25.7×30.1</td>
<td>*女（東京美術館13）</td>
<td>うつ伏せで薄桝をつく女</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>059-A</td>
<td>17.2×24.3</td>
<td>*柿図風景</td>
<td>愛知県美術館（1916）と同柄、墨板</td>
<td>B面は《女学生》</td>
</tr>
<tr>
<td>069-B</td>
<td>17.2×24.3</td>
<td>*柿図風景</td>
<td>愛知県美術館（1916）と同柄、屋根と電柱のベタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>087-A</td>
<td>39.1×26.8</td>
<td>*拍大</td>
<td>大正10年（1921）12月下旬の雪書（翌春は衽元、不明）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>080-B</td>
<td>25.4×39.3</td>
<td>*三味線弾き</td>
<td>6版</td>
<td>A面は《町の風景》</td>
</tr>
<tr>
<td>070</td>
<td>67.4×23.9</td>
<td>*新緑の日暮里</td>
<td>墨板</td>
<td>裏に模型様があるがわかります</td>
</tr>
<tr>
<td>071-A</td>
<td>67.4×26.8</td>
<td>*新緑の日暮里</td>
<td>葉の部分（緑）、家のベタ（未刷か）</td>
<td>裏から線に干削り</td>
</tr>
<tr>
<td>071-B</td>
<td>67.1×26.8</td>
<td>*新緑の日暮里</td>
<td>枝、幹、家</td>
<td>線に干削り</td>
</tr>
<tr>
<td>084-A</td>
<td>39.3×26.4</td>
<td>*新緑の日暮里</td>
<td>地面と塀のベタ、上方に墨板敷様</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>084-B</td>
<td>39.3×26.4</td>
<td>*新緑の日暮里</td>
<td>木々の緑の部分、緑色の敷様</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>066-B</td>
<td>27.2×17.0</td>
<td>*大正美術会</td>
<td>[大正美術会]の文字、[自画自叙刷]印の練習</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>062-A</td>
<td>17.4×24.3</td>
<td>*月のある風景</td>
<td>愛知県美術館（風景（月））と同柄</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>062-B</td>
<td>17.4×24.3</td>
<td>*月のある風景</td>
<td>愛知県美術館（風景（夜））と同柄</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>065-A</td>
<td>19.1×24.5</td>
<td>*月のある風景</td>
<td>愛知県美術館（風景（夜））と同柄、月のぼかし（敷様）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>065-B</td>
<td>19.1×24.5</td>
<td>*月のある風景</td>
<td>愛知県美術館（風景（夜））と同柄、青緑の敷様</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>番号</td>
<td>板寸</td>
<td>作品名</td>
<td>記事</td>
<td>備考</td>
</tr>
<tr>
<td>------</td>
<td>------</td>
<td>--------</td>
<td>------</td>
<td>------</td>
</tr>
<tr>
<td>028-B</td>
<td>20.6×28.3</td>
<td>都市風景</td>
<td>雑誌のカットか</td>
<td>A面は辛酉と未の年賀状</td>
</tr>
<tr>
<td>024-A</td>
<td>16.2×36.5</td>
<td>橋の上の人々</td>
<td>重板</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>024-B</td>
<td>16.2×36.5</td>
<td>橋の上の人々</td>
<td>色板（命の内など）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>074-B</td>
<td>28.9×39.0</td>
<td>花（紫陽花）</td>
<td>鉛筆素描の一部</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>064</td>
<td>24.1×18.1</td>
<td>枝と葉</td>
<td>洋館（鳴きか？）、水鳥、緑帯、樹木の絵</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>026-A</td>
<td>18.4×14.5</td>
<td>番傘の女</td>
<td>塩板、顔、帯、袖のベタ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>026-B</td>
<td>18.4×14.5</td>
<td>番傘の女</td>
<td>下絵紙貼りに顔周辺の影りかけ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>037-B</td>
<td>26.4×39.2</td>
<td>風景（着色素描）</td>
<td>山、屋根、木</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>037-A</td>
<td>26.4×39.2</td>
<td>風景（山、電柱、家並）</td>
<td>群青色、左辺に影りのはみ出し</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>038</td>
<td>29.0×39.2</td>
<td>風景（山、電柱、家並）</td>
<td>赤色</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>083</td>
<td>25.6×39.3</td>
<td>町の風景1</td>
<td>[かき]という店あり、塗板</td>
<td>掛け絵あと</td>
</tr>
<tr>
<td>080-A</td>
<td>25.4×39.3</td>
<td>町の風景2</td>
<td>塗板、[かき]という店あり</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>081-A</td>
<td>26.6×39.1</td>
<td>もたれて坐る女</td>
<td>頬と手の線、背景の木目または流れ</td>
<td>B面は（画室）（大）の髪と衣装</td>
</tr>
<tr>
<td>085</td>
<td>25.7×39.3</td>
<td>もたれて坐る女</td>
<td>塗板</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>094-B</td>
<td>26.7×39.4</td>
<td>文様</td>
<td>花文様？（オレンジと朱）、[孤雁]の文字</td>
<td>A面は（山の水草）</td>
</tr>
<tr>
<td>073-A</td>
<td>34.5×60.7</td>
<td>文様見本</td>
<td>花、牡丹、蝶の文様</td>
<td>非孤雁作、B面は[若竹の歌]</td>
</tr>
<tr>
<td>069-B</td>
<td>62.4×46.4</td>
<td>養生図</td>
<td>第十三芳養生を飾り構図に敷き</td>
<td>奈良県、A面は[若竹の歌]</td>
</tr>
<tr>
<td>005</td>
<td>14.5×11.9</td>
<td>夜の十二階</td>
<td>「東洋時論」カット（文字なし）</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>073-B</td>
<td>34.5×60.7</td>
<td>若竹の歌</td>
<td>若竹の絵と短歌、慶永</td>
<td>非孤雁か、A面は[文様見本]</td>
</tr>
</tbody>
</table>